

〈地域構想フォーラム〉

## 大津波被災地で始めた「自然・人・社会のかかわり」を再考する活動

平吹喜彦

東北学院大学 教養学部 地域構想学科

2011年3月11日、私は富田瑞樹さん（東京情報大学）が率いる調査チームの一員として、中国・雲南省の山間地で「持続可能な土地利用と生活様式に関する景観生態学的な調査」を行っていた。段々畑や松林、照葉樹林、いくつかの小集落から構成される集水域の調査を終え、宿泊先の農家で遅い夕食を取っていた時、Cindy Q. Tangさん（雲南大学）の携帯電話が鳴り、「大地震で日本が大変なことになっている！」との知らせが届いた……衛星テレビのスイッチが入ると、そこに信じられない情景が次々と映し出された。

多くの方々の機転と厚意に支えられ、昆明、関西国際空港、千葉を経て仙台に辿りついたのは3月14日の午後であった。道中、大津波による惨状や原子炉のメルトダウンの報道に接して動揺は深まるばかりであったが、停電とガソリン不足、外出を控える呼びかけのためか、仙台は不気味なほど静かだった。

大震災からしばらくの間、強い余震と放射能汚染におびえながら、私は半ば「抜け殻」のような状態で、夢うつつの日々を過ごした。被災した自宅内の片付けや食料・飲料水の確保にかかわりつつも、「身体と心がひとつでない」ような違和感がつきまとった。

そして、窓越しに仙台平野と海岸線を臨むにつけ、そこが「近くて、別世界のように遠い場所」であることを噛みしめた。ある時は、澄み切った大気を通して、わずかに残った海岸林のマツの木が、碧い海を背景に浮かび上がった。またある時は、季節外れの牡丹雪が止め処なく舞い落ち、大地をうっすらと覆った……「一続きの場

所なのに、今そこに行くことはできないのだ」という認識とともに、「蒲生干潟で活動してきた中野小学校や蒲生地区の皆さんは、どうしているだろう？」、「救援活動は進んでいるのだろうか？」、「仙台空港近くに泊めてあった自家用車は、どこへ行ってしまったのだろうか？」、そして「どうして、こんな事態になってしまったのだろうか？」といった思いが、繰り返し、繰り返し湧き起こった。

私の思考や行動を前向きなものに変えたのは、マスコミによって伝えられた「今時の悲しみを二度と繰り返さない復興・地域づくり」、「積み上がった環境・社会問題の克服可能性を示しうるモデル地域の創出」という主張であった……大震災から半月ほどたった頃から日常生活に落ち着きが戻り始め、「自分自身が持ちあわせている能力、経験、道具・機材、他者との繋がりなどを総動員して、復旧・復興に役立つ活動をしたい」という気持ちが高まっていった。

「自然・人・社会のかかわり」を再考する活動の基盤に据えた「海岸エコトーン」という視点は、宮城県指定の仙台湾海浜自然環境保全地域やタイ王国南東部の砂浜海岸域で実施した生態調査をふり返りつつ考究していた折、「統合的な沿岸域管理 (Integrated Coastal Management)」という思想・手法の中から抽出した概念である。そして、景観生態学やESD (Education for Sustainable Development, 持続を可能にする教育)、自然再生にかかわる研究・実践を共にしてきた原慶太郎さん（東京情報大学）や富田瑞樹さん、菅野洋さん（(株)宮城環境保全研究所）、大山弘子さん（東北緑化環境保全(株)）らと情報・意見交換を重ね

ることで、「海岸エコトーンの視座に立った未来志向の復興」という活動理念が構築されて行くことになる。

4月上旬、この理念を具現化し、さまざまな行政機関や市民団体が取り組み始めた「大津波被災地の復旧活動や復興計画策定」に連携すべく、(1)「海岸エコトーンの視座」の妥当性や有用性を提示・議論するためのフォーラム開催、および(2)土地勘のある仙台湾岸における砂浜海岸エコトーンモニタリングの実施、を企画し始めた。

幸いにも宮城豊彦さん（東北学院大学）の計らいで、4月11日、この活動理念・企画を林野庁仙台森林管理署と宮城県森林整備課に伝達する機会を持つことができた。そして両機関のご理解の下、5月中旬から仙台市宮城野区南蒲生（新浜地区）で「砂浜海岸エコトーンモニタリング」を開始した。また、6月4日には、「フォーラム 仙台湾/海岸エコトーンの復興を考える ー浅海・砂浜・防潮堤・湿地・海岸林・農耕地を一体化する視座ー」を、仙台国際センターで開催した（東北学院大学、

東京情報大学、自然環境復元協会・学会が共催）。活動の多くは、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業S1103002（東北学院大学）・S0801024（東京情報大学）助成金によって支えられた。

「海岸エコトーン」についての解説、2011年5月以降の活動状況、「南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングサイト」とモニタリング結果については、平吹ほか（2011a, b, 2012）、中野・平吹（2011）、富田ほか（2012）、そして「南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングネットワーク」のホームページ（<https://sites.google.com/site/ecotonesendai/>）などで、概要を報告済みである（図1をも参照）。

東日本大震災という「数百年に一度の巨大地震・大津波」は、私にとって人生最大の衝撃となった。それは、取りも直さず「大切なこと・物をいくつも失った喪失感と無念さ」そのものであり、また「地域生態系の分析・評価と持続可能な地域づくり」という長年の研究・実践・教育活動に対して



図1. 仙台湾/砂浜海岸エコトーンを構成する多様かつ多機能な生態系と人工構造物

上段：自然度の高い生態系(東日本大震災以前の状況)、中段：人工構造物と人為的影響の大きい生態系(東日本大震災以前の状況)、下段：大津波被災地における生態系の自律的修復(2011年5～8月の状況)。仙台湾/砂浜海岸エコトーンの生態系は、「海陸間の環境傾度に一義的に支配されながらも、しばしばジグソーパズルのように入り組んだ状態で分布」しており、「その多くが、大津波による壊滅的破壊を免れて、再生し始めている」ようだ。また、こうした調査結果に加えて、「貞山運河、海岸林、そして屋敷林を伴う里地といった先人の土地利用のあり方をしっかり検証すること」で、「未来志向の復興」の設計図がより鮮明かつ実利的になるように思える。

突きつけられた「真価の問い直しを迫る衝動」に由来している。この小文では、そうした思いから始まった「自然・人・社会のかかわり」を再考する活動、「海岸エコトーンの視座に立った未来志向の復興」を支援する活動について、発足時の思索の変遷を紹介した。

大震災から1年を経て、活動主体である「南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングネットワーク」には15名の有志が集い、ささやかではあるが、精一杯の活動が続けられている。私は最近、「未来志向の復興」を「子孫の安寧を保障しうる、うるわしい地域づくり」、「ふるさとの自然・人・社会の豊かさが持続しうる復興」と読み替え、そのためには(1)自律的修復を尊重した多様性・多機能海岸エコトーンの創出と、(2)海岸エコトーンを見渡し、その生態的特質を見据えて、賢く利活用しうる統合的な地域管理の視点が欠かせない、という考え方をますます強くしている。そして、「南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングサイト」のプラットフォーム化を加速させながら、多くの皆さんと交流・協働の営みを深めて行くことを切望している。

## 引用文献

- 平吹喜彦・原慶太郎・菅野洋・富田瑞樹. 2011a. 東日本大震災復興を支援する「多機能・海岸エコトーン」という景観生態学的視座. 景観生態学, 16: 8. 日本景観生態学会.
- 平吹喜彦・仙台湾/南蒲生砂浜海岸エコトーンモニタリングネットワーク. 2012. 砂浜から低地の生態系の回復は進んでいるのか. 自然保護, 526: 4-5.
- 平吹喜彦・富田瑞樹・菅野洋・原慶太郎. 2011b. 東日本大震災・大津波で被災した仙台湾砂浜海岸エコトーンとその植生状況. 薬用植物研究, 33(2): 45-57.
- 中野裕司・平吹喜彦. 2011. 震災瓦礫の土壌資源化による震災復興と海岸エコトーンの再生. 生活と環境, 56(9): 15-19.
- 富田瑞樹・原慶太郎・平吹喜彦・菅野洋. 2012. 津波

によって被災した海岸林の破壊と再生モニタリング. CROSSROADS, 27: 8-9. 東京情報大学総合情報研究所 戦略的研究基盤形成事業部門 総括グループ.